

能(熊野)の素材

『平家物語』卷十「海道下り」

さる程に、本三位の中将重衡の卿をば、鎌倉の前右兵衛佐頼朝、しきりに申されければ、「さらば下さるべし」とて、土肥次郎実平が手より、九郎御曹司の宿所へ渡し奉る。同じき三月十日の日、梶原平三景時に具せられて、関東へこそ下られけれ。西国にていかにもなるべかりし人の、生きながら捕はれて、都へ上り給ふだにちをしきに、今さら又関の東へ赴かれけん心中、推し量られてあはれなり。

四宮河原になりぬれば、こは、昔延喜第四の皇子蟬丸の、関の嵐に心を澄まし、琵琶をひき給ひしに、博雅の三位といつし人、風の吹く日も吹かぬ日も、雨の降る夜も降らぬ夜も、三年が間歩みを運び、立ち聞きて、かの三曲を伝へけん、藁屋の床の古へも、思ひやられてあはれなり。逢坂山うち越えて、勢多の唐橋駒もどろどろ踏みならし、雲雀あがれる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞に曇る鏡山、比良の高嶺を北にして、伊吹の嶽も近づきぬ。心を留むとしなけれども、荒れてなか／＼やさしきは、不破の関屋の板廂、いかに鳴海の汐干潟、涙に袖はしをれつゝ、かの在原のながしの、唐衣きつゝなれにしと詠めけん、三河国の八橋にもなりぬれば、蜘蛛手に物をとあはれなり。浜名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江に騒ぐ波の音、さらでも旅はものうきに、心をつくす夕まぐれ、池田の宿にも着き給ひぬ。

かの宿の長者熊野が女、侍従がもとに、その夜は三位宿せられけり。侍従、三位の中将殿を見奉つて、「日ごろは伝にだに、思し召し寄り給はぬ人の、今日はかかる所へ入らせ給ふ事の不思議さよ」とて、一首の歌を奉る。

旅の空はにふの小屋のいぶせさに故郷いかに恋しかるらん

中將の返事に、

故郷も恋しくもなし旅の空都も終のすみかならねば

やゝあつて、中將、梶原を召して、「さてもたゞ今の歌の主はいかなる者ぞ。やさしうも仕つたるものかな」と宣へば、景時畏つて申しけるは、「君は未だ知し召され候はずや。あれこそ屋島の大正殿の、未だ当国の守にて渡らせ給ひし時、召され参らせて、御最愛候ひしに、老母をこれに留め置き、常は暇を申ししかども、給はらざりければ、頃は弥生の初めにもや候ひけん、

いかにせん都の春も惜しけれとなれしあづまの花や散るらん

といふ名歌仕り、暇を賜はつてまかり下り候ひし、海道一の名人にて候」とぞ申しける。

能(熊野)

※現行観世流謡本による。「」「小段名。「」コトバ。』ニフシ。

三番目物。鬘物。現在能。金春禅竹作か。五流の現行曲(喜多流は「湯谷」と曲名表記)。

シテ—熊野

ツレ—朝顔

ワキ—平宗盛

ワキツレ—従者

第一段 ワキの登場、ワキ・ワキツレの応対 宗盛は熊野が来るのを待つ

「名ノリ」ワキ「これは平の宗盛なり、さても遠江の国池田の宿の長をば熊野と申し候、久しく都に留め置きて候が、老母の勞りとて度々暇を乞ひ候へども、この春ばかりの花見の友と思ひ留め置きて候

「問答」ワキ「いかに誰かある」ワキツレ「御前に候」ワキ「熊野来りてあらば此方へ申し候へ」ワキツレ「畏つて候

第二段 ツレの登場 都に上つた朝顔が熊野のもとを訪ねる

「次第」ツレ「夢の間惜しき春なれや、夢の間惜しき春なれや、咲く頃花を尋ねん。

「名ノリ」ツレ「これは遠江の国池田の宿、長者の御内に仕へ申す、朝顔と申す女にて候、「さても熊野久しく都に御入り候が、この程老母の御勞りとて、度々人を御上せ候へども、更に御下りもなく候程に、この度は朝顔が御迎ひに上り候

「上歌」ツレ「この程の、旅の衣の日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、幾夕暮の宿ならん、夢も数添ふ仮枕、明かし暮らして程もなく、都に早く着きにけり、都に早く着きにけり。

「着キゼリフ」ツレ「急ぎ候程に、これははや都に着きて候、これなる御内が熊野の御入り候所にてありげに候、まづまづ案内を申さばやと思ひ候

「口」ツレ「いかに案内申し候、池田の宿より朝顔が参りて候それぞれ御申し候へ」

第二段 シテの登場 熊野は老母の身を案じる

「サシ」シテ「草木は雨露の恵み、養ひ得ては花の父母たり、況んや人間に於いてをや、あら御心もとなや何か御入り候らん。

第四段 ツレ・シテの応対 文を見た熊野は宗盛のもとへ向かう

「問答」ツレ「池田の宿より朝顔が参りて候」シテ「なに朝顔と申すかあら珍しや、さて御勞りは何と御入りあるぞ」ツレ「以つての外に御入り候、これに御文の候御覽候へ」シテ「あら嬉しやまづまづ御文を見うずるにて候、あら笑止や、この御文のやうも頼み少う見えて候」ツレ「さやうに御入り候」シテ「この上は朝顔をも連れて参り、又この文をも御目にかけて、御暇を申さうずるにてあるぞ此方へ来り候へ」

第五段 シテ・ワキツレ・ワキの応対 熊野は宗盛の前で老母の手紙を読む

「問答」シテ「誰か渡り候」ワキツレ「誰にて御座候ぞ、や、熊野の御参りにて候」シテ「わらはが参りたる由御申し候へ」ワキツレ「心得申し候

「問答」ワキツレ「いかに申し上げ候、熊野の御参りにて候」ワキ「此方へ来れと申し候へ」ワキツレ「畏つて候

「問答」ワキツレ「此方へ御参り候へ」シテ「いかに申し上げ候、老母の勞り以つての外に候とて、この度は朝顔に文を上げて候、便なう候へどもそと見参に入れ候べし」ワキ「何と故郷よりの文と候や、見るまでもなしそれにて高らかに読み候へ」

「文」シテ「甘泉殿の春の夜の夢、心を砕く端となり、驪山宮の秋の夜の月、終りなきにしもあらず、末世一代教主の如來も、生死の掟をば免れ給はず、過ぎにし如月の頃申しし如く、何とやらんこの春は、年古り増る朽木桜、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじと心弱き、老の鶯逢ふ事も、涙に咽ぶばかりなり、ただ然るべくは宣きやうに申し、暫しの御暇を賜りて、今一度まみえおはしませ、さなきだに親子は一世の仲なるに、同じ世にだに添ひ給はずは、孝行にも外れ給ふべし、ただ返す返すも命の内に今一度、見参らせたくこそ候へとよ、老いぬれば、さらぬ別れのありと云へば、いよいよ見まほしき君かなと、古言までも思ひ出の、涙ながら書き留む。

「上歌」地「そもこの歌と申すは、そもこの歌と申すは、在原の業平の、その身は朝に暇なきを、長岡に住み給

ふ、老母の詠める歌なり、さてこそ業平も、さらぬ別れのなくもがな、千代もと祈る子の為と、詠みし事こそ哀れなれ、詠みし事こそあはれなれ。

『伊勢物語』八十四段

むかし、おとこ有けり。身はいやしなから、母なん宮なりける。その母、長岡といふ所に住み給けり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しば／＼えまうです。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、十二月ばかりに、とみのこととて御ふみあり。おどろきて見れば、歌あり。

老ぬればさらぬ別れのありといへばいよ／＼見ま／＼ほしき君かな
かの子、いた／＼うち泣きてよめる。

世中にさらぬ別れのなくも哉千世もといひる人の子のため

第六段 シテ・ワキの応対 熊野は暇を乞うが宗盛は花見に誘う

〔問答〕 シテ「今はかやうに候へば、御暇を賜り、東に下り候へし」ワキ「老母の勞りはさる事なれどもさりながら、この春ばかりの花見の友、いかでか見捨て給ふべき」シテ「御言葉を返せば恐れなれども、花は春あらば今に限るべからず、これは徒なる玉の緒の、永き別れとなりやせん、ただ御暇を賜はり候へ」ワキ「いやいやさやうに心弱き、身に任せては叶ふまじ、いかにも心を慰めの、花見の車同車にて、『共に心を慰まんと

〔上歌〕 地『牛飼車寄せよとて、牛飼車寄せよとて、これも思ひの家の内、はや御出でと勸むれど、心は先に行きかぬる、足弱車の、力なき花見なりけり。』

第七段 シテの道行 清水寺へ向かう車中で熊野は周囲の様子を眺める

〔一セイ〕 シテ「名も清き、水のまにまに寤め来れば、地『川は昔羽の山桜、シテ』東路とても東山、せめて其方のなつかしや。』

〔サシ〕 地『春前に雨あつて花の開くる事早し、秋後に霜なうして落葉遅し、山外に山あつて山尽きず、路中に路多うして道窮まりなし」シテ「山青く山白くして雲来去す」地『人樂しみ人愁ふ、これ皆世上の有様なり。』

〔下歌〕 地『誰か言ひし春の色、げに長閑なる東山。』

〔上歌〕 地『四條五條の橋の上、四條五條の橋の上、老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を連ねて行末の、雲かと見えて八重一重、咲く九重の花盛り、名に負ふ春の景色かな、名に負ふ春の景色かな。』

〔ロンギ〕 地『河原おもてを過ぎ行けば、急ぐ心の程もなく、車大路や六波羅の、地藏堂よと伏し拜む、シテ『観音も同座あり、闍提救世の、方便あらたに、たらちねを守り給へや、地』げにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の、愛宕の寺もうち過ぎぬ、六道の辻とかや、シテ』げに恐ろしやこの道は、冥途に通ふなるものを、心ほそ鳥部山、地』煙の末も薄霞む、声も旅雁の横たはる、シテ』北斗の星の曇りなき、地』御法の花も開くなる、シテ』經書堂は、これかとよ、地』そのたらちねを尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば、シテ』春の隙行く駒の道、地』はや程もな／＼これぞ、この、シテ』車宿り 地』馬留め、こゝより花車、おりゐの衣播磨瀉、飾磨の徒路清水の、仏の御前に、念誦して、母の祈誓を申さん。』

第八段 ワキ・ワキツレ・シテの応対、シテの語り舞 熊野は酒宴の座を取り持つ

〔問答〕 ワキ「いかに誰かある」ワキツレ「御前に候」ワキ「熊野は何処にあるぞ」ワキツレ「未だ御堂に御座候」ワキ「何とて遅なはりたるぞ、急いで此方へと申し候へ」ワキツレ「畏つて候

〔問答〕 ワキツレ「いかに朝顔に申し候、はや花の下の御酒宴の始まりて候、急いで御参りあれとの御事にて候、その由仰せられ候へ」ツレ「心得申し候

〔問答〕 ツレ「いかに申し候、はや花の下の御酒宴の始まりて候、急いで御参りあれとの御事にて候」シテ「何とはや御酒宴の始まりたると申すか」ツレ「さん候」シテ「さらば参らうずるにて候

「□」シテ「なうなう皆々近う御参り候へ、あら面白の花や候、今を盛りと見えて候に、何とて御当座なども遊ばされ候はぬぞ

「クリ」シテ「げにや思ひ内であれば、色外にあらはる、地』よしや由なき世の習ひ、歎きてもまた余りあり。

「サシ」シテ「花前に蝶舞ふ紛々たる雪、地』柳上に鶯飛ぶ片々たる金、花は流水に随つて香の来る事疾し、鐘は寒雲を隔てて声の到る事遅し。

「クセ」地』清水寺の鐘の声、祇園精舎をあらはし、諸行無常の声やらん、地主権現の花の色、娑羅双樹の理なり、生者必滅の世の習い、げに例あるよそほひ。仏も元は捨てし世の、半ばは雲に上見えぬ、鶯のお山の名を残す、寺は桂の橋柱、立ち出でて峯の雲、花やあらぬ初桜の、祇園林下河原。シテ「南を遥かに眺むれば、地』大悲擁護の薄霞、熊野権現の移ります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の、青かりし葉の秋、また花の春は清水の、ただ頼め頼もしき、春も千々の花盛り。

第九段 シテの舞事 熊野は舞を舞う

「一セイ」シテ「山の名の、音羽嵐の花の雪、地』深き情を人や知る。

「□」シテ「わらはお酌に参り候へし ワキ』いかに熊野一さし舞ひ候へ

「一セイ」地』深き情けを人や知る。【中之舞】

第十段 シテの詠唱 散る花を見て熊野は老母を案じる

「問答」シテ「なうなう俄かに村雨のして花の散り候はいかに ワキ』げにげに村雨の降り来つて花を散らし候よシテ』あら心なの村雨やな

「一セイ」シテ「春雨の、地』降るは涙か、降るは涙か桜花、散るを惜しまぬ人やある。【イロエ】

第十一段 結末 宗盛は熊野に暇を与え、熊野はただちに帰郷する

「問答」ワキ』由ありげなる言葉の種取り上げ見れば、『いかにせん、都の春も惜しけれど シテ』馴れし東の花や散るらん ワキ』げに道理なり哀れなり、はやはや暇取らすぞ東に下り候へ シテ』なに御暇と候や ワキ』なかなかの事とくとく下り給ふべし シテ』あら嬉しや尊やな、これ観音の御利生なり

「歌」シテ『これまでなりや嬉しやな、地』これまでなりや嬉しやな、かくて都にお供せば、またもや御意の変るべき、ただこのままにお暇と、木綿附の鳥が啼く、東路さして行く道の、廳て休らふ逢坂の、関の戸ざしも心して、明け行く後の山見えて、花を見捨つる雁の、それは越路我はまた、東に帰る名残かな、東に帰る名残かな。